

第 51 号(2012. 5.19 配信)

東京スカイツリーが5月22日にオープン！東京の新観光サイト、というより、実質世界一の巨人タワー、画期的なランドマーク誕生ですから、当日はもとより、その前後の大混雑は想定をはるかに超えると予測されます。新聞もTVも、連日、間断ないほどに特集を組み、著名な建築、アートの専門家や、俳優・タレントを次々に登場させ、さまざまな報道を競い合うでしょう。

こういう超ラッシュ時ですから、「サロン便り」は、その焦点から距離を置き、関連がありそうでなさそうな別のタワーの話や、過日見てきた「ザ・タワー」展の話を取り上げてみたいと思います。

そうはいつでも、無関係ってわけにもいきません。スカイツリーは、何のために計画されたのか、おさらい風に記しておきます。

本来の目的は、東京タワーの後継ぎです。地デジ(地上デジタル)の電波を送り出し、しっかり届けるためです。どうして？—今や都心には、200m級の超高層ビルが林立し、電波が届きにくいビル陰が増えています。ケーブルテレビの利用が必要な場所もあります。移動しながらケータイなどで地デジが見られるワンセグのサービスも、場所によって電波がとぎれがち。これらの問題解決のため、東京の民放5社とNHKが600m級の電波塔を建てる検討を本格的に始めたのが、10年ほど前の2003年でした。要するに、テレビの受信障害対策の結晶といえます。

高さは、初めは610mの計画でした。それが、中国の広州で建設が進むタワーに負けそうだったので、634mに変わりました。日本の文化、技術を世界に知ってもらおうと、昔の地域名「武蔵」に語呂合わせした「ムサシ=634」になったのです。

この際、ほんの少々童心に返って、皆さんもそれぞれご経験をお持ちであろう高さ比べかタワーめぐりを思い出してみませんか。

私が子どもの頃は、パソコンはもちろん、東京タワーさえない時代。手頃な愛用書だった『児童年鑑』や図鑑類を開いては、高さ比べの絵図を見るのが好きでした。特にエッフェル塔やピサの斜塔には心を引かれ、繰り返し絵や写真を見たり物語も読みました。高さ比べですから、タワーだけでなく、ピラミッドやスフィンクスなども描かれ、居ながらにして世界の高みに魅せられました。行ってみたいという願望は強くなるばかり。後日、いずれも次々に実現して、実のある達成感を味わったものです。海外協力の仕事に飛びこんだ気持ちは、子ども時代の『児童年鑑』に、その萌芽の一部があったかも知れません。

男の子に限らず、女の子だって、高い塔を見上げて、上ってみたいという欲求があるでしょう。何も著名なものに限らない。どこでも何でも、見たい行きたい欲望が先行して当たり前です。また、行って歩いて、見たり聞いたり旅を楽しんでいるうちに、思わぬ発見や感動があり得ます。私はモロッコを歩いた際に、数あるモスクがすべて角型ミナレットに統一し、濃い茶系レンガの美しい積み上げで、高く聳える特有のモロッコ式建築の面白さに魅了されました。イスラムと関わりもなく興味があったわけでもないのに。

塔の魅力は、それぞれの個性や造り、色彩や環境など、数々上げられると考えられます。皆さんも、旅のさなかで、似たような発見やタワー観等々をお持ちでしょう。旅は「非日常」の連続ですから、普段はできそうにもない数少ない機会に、たまたま魅せられ感動して得たそれらの成果は貴重だと思います。

人はなぜ塔を建てるのか。多くの塔は、教会や寺院など、信仰の空間にあって祈りの対象でした。薬師寺の三重塔や法隆寺の五重塔なども、その代表例です。「塔(Tower)」という言葉自体、インド語派に属する古代語サンスクリット語が語源で「ストゥーパ」の音訳「卒塔婆(そとうば)」、その略の「塔婆」からきているとのこと。塔婆というと、今は供養や追善のために墓参の時に立てる、あの細長い板を指します。切り込みをつけて、塔の形を示しているそうです。

スカイツリーは、まず宗教とは無縁もいいところ。現代の塔は、そのほとんどが、大都市の発展、社会の広域化に伴って、展望の効果や建築の美を競う方向に進んでいるといえましょう。

つい先日、スカイツリーの完成記念特別展と銘打って、両国の「江戸東京博物館」で開催中だった企画展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり」に行ってみました。話題のスカイツリーPRとは離れて、近代の都市と塔＝タワーの関わりを、多種多様の写真や資料を通じて見よう理解しようという趣旨の展覧会です。

人はなぜ高みに上るのか、旧約聖書の「バベルの塔」の物語を皮切りに、例によって音声ガイドを聴きながら約1時間、ほぼくまなく観覧して回りました。主要な展示は、エッフェル塔、東京タワーに、大阪の代表・通天閣の3タワー。いずれも宗教には何の関わりもない大都市の展望塔です。ごく単純に、高みから町並みや人々の動きを眺めたい。地域の外観、周辺の景観を見渡したい。その快感を味わいたい。東京生まれ、東京在住者ですから、私のタワーへの関心も同じです。

エッフェル塔は、よく知られる通り、1889年(明治22年)にパリで開催の万国博覧会で建造された、いわばタワーの元祖的存在です。沸き上がった反対論に挑戦したエッフェルさんの気概がわかる気がします。世界で初の試みでしたから。大都市の塔は、「近代」の到来を告げるものだったといえるでしょう。

フーム?と思ったのは、物見高い江戸の衆が、江戸期の初めから明治期に入る約300年間に、高みの構築を1件も試みていなかったこと。建築の技術も資金もなかったり、成否も見通せない時代だったといえればそれまでの話ですが、寄ってたかって高層の眺望台くらいは、造ろうと思えばできたのではなからうか?そんな疑問がわいてきました。そう、こわいのは江戸名物の火事だったかも。そこで気づいたのが、江戸城の天守閣の話です。おそらく当時の江戸随一の高層建築物だったに違いない、と。

調べてみると、家康の居城となって、江戸城本丸・天守閣はじめ壮大な建築工事が1604年(慶長9年)に着手され、2代将軍秀忠から3代目の家光が継いで、1636年(寛永13年)に完成したようです。以後、数回の火災が起き、1657年の明暦の大火(明暦3年正月)で天守閣はじめ城の見どころはすべて灰燼に帰してしまいました。わずか20年の栄華でついで、再建の話もないまま過ぎてしまったらしい。当時の江戸人は、今さらあの豪壮な天守閣の再現は不可能、代用物を造るなんて無礼千万でもある、無くなりや仕方がない、大火がこわいetc.。わかるような気がします。

今は国内随所で、昔の城塞、特に本丸・天守閣を復元して新しい観光資源として活用する実例が幾つもあります。すでに復元され賑わっている都市や地域は少なくありません。江戸城は、設計図など残らず焼失して手掛かりもなく、世代の風潮から孤独といえればその通り。ちょっと残念です。

ご存知の方が多いたと思いますが、江戸城つまり今の皇居の中には、大手門から入ると東御苑と呼ぶ散策庭園に旧本丸の広場があります。その北側に「天守閣跡」と明示された高台が造られ、だれでも上ったり写真を撮ったりできます。月、金曜が休園日でしたが、変更もあり確かめること。

それはさておき、会場で面白い鳥観図を見ました。「江戸一目(ひとめ)図屏風」。鋏形蕙斎(くわがたけいさい)という岡山・津山藩の絵師が1809年に描いた大判の鳥観図で、手前に隅田川、さらに浅草、両国、日本橋、江戸城などの江戸名所を描き、かなたに冠雪した富士山を臨むという

壮大な光景です。スカイツリーを今の場所に選んだ経緯が、この鳥観図の出来栄えにあったといわれるほどですから、見応えがありました。江戸の衆は、これらの鳥観図を見ることができたのか。おそらく限られたお偉方だけが楽しめたのでしょう。大衆娯楽の諸作品とは違いますから。

ところで、東京タワーはどうか。開業年が1958年でしたから50年余にわたってテレビ塔としての責務を果たしてくれたわけですが…。高さ333mは、新タワーに比すべきもない。今後も活気を保持していけるか。

5月初め、全国紙の夕刊トップで、「老舗の余裕」、「普段使い、客足回復」との大見出しの記事が載りました。このGW(大連休)に、入場を待ちわびる行列ができ、「今なお人気者」だそうです。「立ち位置」がかなり離れ、展望する方向にも違いがあります。スカイツリーに楽々と入れるまでのこの先何年間か、人気度も行列も変わらないのではないか? 「相乗効果」が期待できるかどうかは、将来の課題でしょうか。

1, 2年前までですが、スカイツリー出現前は、この区域には時折行きました。下町散策を同年代の友人たちと続け、浅草から東武伊勢崎線で旧業平橋(今はスカイツリー駅)～押上を經由し向島百花園に行ったり、文学上の関心度が高い三囲(みめぐり)神社から隅田公園を歩いたり、スカイツリー建設中も、その全容を正面に望む言問橋上から写真を撮りに行ってみました。そもそも現地は、広い敷地や公園にはほど遠く、住宅、商店密集場所でした。TVを観ていると、今はかなり変容したようですが…。

周辺の街を見て回り、展望台に上ってゆっくり大東京を眺望できる日はいつになるでしょうか。しばらく様子を見ましょう。季節や気象、天候、客足、評判などの各種情報を得た上で、いずれ適当な時期や日取りを考えてみたいと思います。東京タワーだって、東京に住んでいればいつでもと思いながら、開館何年後だったか、知人の外国人が希望し同行したのが初回でした。スカイツリーには、どうかな?

(5月17日記。国際サブロー)